

仏教比丘尼戒復興運動と 二〇〇七年ハンブルグ国際会議

岩本明美

IWAMOTO Akemi

2007年7月18日から20日までの三日間、ドイツのハンブルグ大学で、First International Congress on Buddhist Women's Role in the Sangha: Bhikshuni Vinaya and Ordination Lineages (『サンガにおける女性仏教徒の役割——比丘尼ヴィナヤと戒脈』第1回国際会議)が開催された。

この会議の中心議題は、チベット仏教への比丘尼戒の導入をめぐるものであり、最終日にはダライ・ラマ14世が連日の議論を受けて何らかの決定をなすという設定で行われた。会議には、世界十九ヶ国から仏教教団やセンターをリードする出家者や在家修行者がやってきただけでなく、主催者の一人である Lambert Schmithausen (ハンブルグ大学名誉教授)をはじめとする仏教学界をリードする仏教文献学者も参加した。ダライ・ラマの決定はチベット仏教以外の伝統仏教にも影響を及ぼすことは必至であり、仏教史に残る会議として注目されたが、純粋な仏教文献学者が仏教実践上の問題解決に関与したという点でも、確かに画期的なことであった。

本稿ではこのハンブルグ国際会議について報告するとともに、この会議をもたらした最大の原動力とみなされるサキャディータの比丘尼戒復興運動について紹介する。

はじめに

ハンブルグ国際会議の歴史的意義を把握しやすくするために、最初に伝統的な仏教者のカテゴリーと、仏教における女性出家者のステータスについて概観しておきたい。伝統的には、仏教のサンガ(教団)とは、具足戒(比丘戒)を受けた男性出家者である比丘(Skt. bhikṣu, Pali bhikkhu)の団体と具足戒(比丘尼戒)を受けた女性出家者である比丘尼(bhikṣuṇī, bhikkhuni)の団体の



左から Lambert Schmithausen と Carola Roloff

みを指す¹。一方、在家信者は、男女それぞれ優婆塞 (upāsaka) と優婆夷 (upāsikā) と呼ばれ、在家の五戒を守る。以上の比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷で「四衆」(four-fold assembly or community) を構成し、これを完備しているのが仏教にとって理想的な状態である。

二十歳以前には具足戒を受ける資格がないため、他に二十歳未満の十戒を守る出家者として、沙弥 (śrāmaṇera, sāmaṇera) と沙弥尼 (śrāmaṇerī, sāmaṇerī) がいる。それぞれ比丘と比丘尼の候補者である。また結婚経験者である女性出家者は、正学女 (式叉摩那, śikṣamānā, sikkhamānā) と呼ばれ、六法戒を守る。結婚経験者は二十歳以前でも比丘尼戒を受けられるが、二年間は正学女に留まらなければならない。もし妊娠していた場合、妊娠後出産と育児に少なくとも二年を要するからである。

日本語の「尼」や「尼僧」、あるいは英語の“nun”は、比丘尼戒をもっていない女性

出家者に対しても用いられるので、本稿では曖昧さを避けるために比丘尼戒を受けている尼僧のみに言及する場合は「比丘尼」を用いる。なお、公式の手続きをへて比丘尼戒を受けていない限り、ある尼僧が同様の戒を個人的に厳守し、その宗教的態度や精神がいかに高かろうと本稿では比丘尼とは考えない。

さて、よく知られているように、女性ははじめブッダに入団を拒まれた。ブッダの侍者であったアーナンダの取りなしによって、ようやく四度目の懇請で入団を認められたものの、女性は八つの「ガルダンマ」(garudhamma, 重法) と呼ばれる条件を課せられることになった。その第一に「百年具足戒を守っている比丘尼であっても、その日に具足戒を受けた比丘に対して、敬礼し、起立し、合掌し、恭敬しなければならない」(Aṅguttara-nikāya IV, 276) とあることに明らかかなように、比丘尼は比丘の権威のもとに置かれた。

この男性優位のあり方は、比丘尼の授戒にも影響し、比丘サンガの存在なしには比丘尼戒を与えることはできない。どの伝統仏教であれ、比丘尼の資格を授けるためには、それぞれが依拠するヴィナヤの規定に従い、出家後ある年数を経た複数の比丘尼と比丘が授戒儀式に列席する必要がある。具足戒 (upasampadā) は、いわば比丘や比丘尼を繋ぐ鎖のようなものであり、ひとたびこの連鎖が途切れると後代は具足戒を受けることができなくなってしまうのである。

このような断絶を経験したのが、スリランカの比丘尼戒の戒脈である。スリランカには、紀元前三世紀中頃インドから比丘尼戒が伝わったが、タミール系チョーラ王朝の支配により 1017 年に伝戒が途絶えてしまった。同様に 1050 年までに比丘戒の戒脈も失われたが、比丘戒はチョーラ勢力を駆逐したヴィジャヤバーフ王 (1055-1110 在位) がビルマから比丘を招請して復興している。



Samdhong Rinpoche

テーラワダ仏教圏で比丘尼サンガが繁栄した歴史をもつことが確実なのはスリランカのみであり²、そのスリランカにほぼ千年ぶりに近年比丘尼が復活するまで、テーラワダ仏教圏で比丘尼の資格を得ることは不可能であった。

他方、スリランカの比丘尼によって 433 年に中国に伝えられたという比丘尼戒は³、台湾、香港、韓国、ベトナムにも伝わり、現在も比丘尼戒が授受されている。

そのため、比丘尼になりたいテーラワダ仏教を実践する女性たちは、台湾、香港、韓国などに赴き資格を得て来た。しかしながら、彼女たちは自国では、比丘サンガからの抵抗など未だ大きな困難を背負っている。

ハンブルグ国際会議は、ヴィナヤ等を精査することによって、このようなテーラワダの比丘尼が直面している困難を打開すること、そして比丘尼サンガが確立された歴史をもたないチベット仏教⁴に比丘尼戒を導入する道を開くことを主たる目的として開催されたのである。

サキャディータと比丘尼戒復興運動

ハンブルグ国際会議開催へと導いたサキャディータの運動は日本ではほとんど知られていないが⁵、運動が始まったのは、二十年以上も前である⁶。パリ語でブツダの娘たちを意味するサキャディータ (Sakyadhītā) とは、国際女性仏教者協会 (International Association of Buddhist Women) のことである。1987 年 2 月インドのブツダガヤに、欧米人比丘尼を含む伝統仏教を実践するおよそ百人の男女の出家者、欧米で教育を受けたタイやスリランカの在家女性仏教徒、そしてフェミニストの学者たちが集った。この会合は、のちにサキャディータ第 1 回国

際会議と呼ばれることになるが、実際にはこの会合の成果として、サキャディータが結成されたのである。

サキャディータの共同創設者は、現会長であるアメリカ人比丘尼 Karma Lekshe Tsomo（サンディエゴ大学准教授）と当時タンマサット大学の教授であったタイ人 Chatsumarn Kabilsingh(aka Bhikkhuni Dhammanandā) と故ドイツ人比丘尼 Ayya Khema である。彼女たちは、伝統仏教の出家制度に男女格差のあることに疑問を抱き、同様の関心を持つものに集会を呼びかけたのである。この集会が多く的女性修行者にとって、他の伝統仏教の出家者と顔を合わせる初めての機会となった。その新しさと、また当会の基調講演をダライ・ラマが行ったことでもかなり注目を集めたようである⁷。

サキャディータの掲げる目標は、以下の六つである。

1. ブッダの教えを実践することによって、世界平和を推進すること。
2. 世界中の女性仏教徒のためのコミュニケーション・ネットワークをつくること。
3. 多様な伝統仏教間の調和と理解を促すこと。
4. 女性を励まし、仏法の教師として教育するのを援助すること。
5. 女性が教えを学び実践するための改良された施設を供給すること。
6. 比丘尼サンガを、現在存在していないところに設立するのを支援すること。

以上の六つの目標を達成するために、サキャディータは先のブッダガヤの会合を含め、これまでに九回の国際会議を開催し、今年 2008 年 7 月にウランバートルで第 10 回を開催する予定である。

第 1 回 : Bodhgaya, India (February 1987)

第 2 回 : Bangkok, Thailand (October 1991)

第 3 回 : Colombo, Sri Lanka (October 1993)

第 4 回 : Leh, Ladakh in India (August 1995)

第 5 回 : Phnom Penh, Cambodia (December 1998)

第 6 回 : Lumbini, Nepal (February 2000)

第 7 回 : Taipei, Taiwan (July 2002)

第 8 回 : Seoul, Korea (June 27–July 2, 2004)

第 9 回 : Kuala Lumpur, Malaysia (June 17–21, 2006)

第 10 回 : Ulan Bator, Mongolia (July 1–5, 2008)

第 2 回会議の開催は遅れたが⁸、それ以後ほぼ予定通り二年に一度会議が開かれてきた。サキャディータの会議は、通常の学術会議とはひと味違っている。筆者が参加した第 8 回韓国会議について述べてみよう⁹。参加者は、およそ 1000 名あった。当初予想された 200 名をはるかに上回ったのは、韓国政府がサポートしたこと、韓国には熱心な仏教信者が多いこと、また前回の台湾の会議が非常に評判が良かったことなどが考えられるが、サキャディータ自体が世に知られるようになってきたためでもあろう。会議には男性も自由に参加できるが参加者の九割以上は女性で、韓国人の一般信者をのぞけば、女性出家修行者がおそらく七割以上、その他は研究者やサイコセラピスト等であった。またジャーナリストも少なからず取材に来ており、二十五社が記者会見に臨んだという。

会場は韓国最大の仏教宗派である曹溪宗の中央サンガ大学で、ほとんどの参加者が宿泊もその大学の寮を利用した。会議それ自体は、6 月 27 日から 7 月 2 日までの六日間であったが、その後三日間はテンプルツアーがあった。会議初日の 27 日から、毎朝メディテーションの時間が設けられていた。日本の曹洞宗、韓国の曹溪宗、チベット仏教、

中国仏教、テーラワーダ仏教の代表者が一日ずつ交代で指導に当たった。自由参加であったが、筆者は修行道を研究テーマとしていることもあり、全てに参加した。各伝統の相違点がわかりとても有益であった。初日は、午前中に開会式と基調講演、午後にはソウル市内ツアーとレセプションがあり、例外的なスケジュールであったが、その他の日は概ね、午前と午後それぞれパネルプレゼンテーションとグループ別ディスカッションが一つずつ行われた。夕食前にはチャンティングが行われ、夕食後には文化プログラムとして毎夕韓国の伝統舞踏や歌などが、一流のパフォーマーによって披露された。

パネルプレゼンテーションでは、本会議のテーマであった、“Discipline and Practice of Buddhist Women: Present and Past”に応じた十二のサブテーマのもとに、約50名くらいが発表した。グループ別ディスカッションでは、5名から15名くらいのグループに分かれて様々なトピックが論じられたが、筆者は西洋仏教に関連するトピックのディスカッションに多く参加した。フィールドの声を直接聞く機会となり、得難い情報を容易に入手することができた。なお、会議中はハングル語と英語はつねに相互通訳され、プレゼンテーションの間は中国語と日本語への同時通訳も得られた。

アジア諸国から参加した女性修行者は、当然のことながら韓国の尼僧が最も多かったが、台湾からもかなり多くの尼僧が参加していた。韓国でも台湾でも仏教は非常に盛んであるが、出家者の男女の比率は、韓国はおおよそ半々で、台湾では八割～九割以上を女性が占めているようである。チベット仏教の実践者は、インドヒマラヤ地域と南インドから多く参加し、テーラワーダは、



左から Kusuma Devendra と Karma Lekshe Tsomo

スリランカ、ネパール、タイ、カンボジア等から参加していた。ベトナムからは、大乘とテーラワーダの両方の参加者があった。日本からは今回はじめて国際的にも知られている曹洞宗の青山俊董老師が参加したが、多忙のため一泊したのみであった。結局会議の最初から最後までいた日本人は、おそらく四人だけであり、筆者も含め全員研究者であった。開会式と閉会式では各伝統仏教が順次舞台上に上り、それぞれの伝統にしたがってチャンティングを行ったが、日本仏教は開会式では青山俊董老師を含む三人がいたものの、閉会式ではアメリカ在住の浄土真宗の寺の住職（or 坊守？）谷口昌陽ただ一人が舞台上に上ることとなった¹⁰。

一方、欧米人女性修行者では、世界の尼僧の尊敬の的であり、最終的な十二年間の孤独な洞窟修行を含めて二十年以上ヒマラヤで修行したことで有名なイギリス人比丘尼 Tenzin Palmo、諸宗教間対話のパイオニアであるアメリカ人比丘尼 Karuna Dharma、韓国で長期間修行をした後還俗したフランス人 Martin Batchelor（夫は、*Buddhism*

Without Beliefs の著者、Stephen Batchelor) も参加していた。アメリカの学者では、基調講演を行った Anne Carolyn Klein と荒井ポーラの他、Rita M. Gross や Robert Buswell などの姿もみえた。ちなみに、アジアで長期の修行経験のある欧米人は、会議中通訳として大いに貢献し、またディスカッションの場では概してディスカッションに慣れていないアジアの女性をうまくリードしていた。

サキャディータの会議は、参加者の親交を深めるのに非常に効果的であり、伝統を超えたネットワーク作りの格好の場となる。Karma Lekshe Tsomo がダラムサラに設立した Jamyang Choling Institute から寄付によって参加していたチベット仏教の沙弥尼たちなどは、初めて異文化、異仏教に触れて非常に興奮している様子であった。諸伝統間の交流から得られる知識や刺激も計りしれないであろう。

サキャディータの会議はまた、会議開催地の仏教のあり方にも大きな影響を及ぼしてきた¹¹。たとえば、1993年にコロンボで第3回サキャディータ会議が開催されたスリランカでは、その開催が契機となって、比丘尼復活をめぐる賛否両論の百年来の議論がグローバル化され、比丘尼復活への気運が一気に高まったのである。

他方、サキャディータの運動は、韓国や台湾の仏教団体などによる伝統に縛られない国際的な得度式の実施をも促し、それによってスリランカの比丘尼復活の道が開かれたのである。1988年12月ロサンゼルス(シーライテンプル)で台湾の仏教団体である佛光山が主催した得度授戒式では、十九ヶ国の女性修行者が受戒した。そのなかに五人のスリランカ人が含まれていた。もっともこの五人は、スリランカ社会からの厳しい批判にさらされ、比丘尼として

生き残ることはなかったといわれている¹²。その後1996年12月8日インドのサルナートでマハーボーディ協会によって組織された得度式では、スリランカでダサシルマータ(dasasilmātā)と呼ばれる十戒をもつ尼僧10名が、韓国の曹溪宗の比丘尼から具足戒を受けた¹³。さらに1998年2月には、今度はインドのブツダガヤで佛光山によって組織された得度式で、20名のダサシルマータが比丘尼戒を受けた。ちなみに、これは近代で最も整った国際的な授戒式とみなされており、二十三ヶ国から134名の尼僧が受戒した。その後、スリランカでは比丘尼が増加し続け、2007年7月の時点ですでに五百人の比丘尼が誕生しているという¹⁴。

タイの比丘尼運動とサキャディータの関わりはより顕著である。というのも、2003年2月にタイで第二の比丘尼となったのは、サキャディータの共同創設者であり、初代会長であった Chatsumarn Kabilsingh (aka Dhammanandā) だからである。ちなみにタイの比丘尼第一号は、1959年に台湾で比丘尼の資格を得た、彼女の母 Voramai Kabilsingh(1908-2003) である。

このようにテーラワダ世界では、未だ強い抵抗があるとはいえ、比丘尼運動は概して前進しているといえる。では、チベット仏教ではどうか。

サキャディータの運動をその創設以来サポートしてきたダライ・ラマ14世は、チベット仏教にも比丘尼サンガを確立することに肯定的である。しかしながらダライ・ラマは、2002年第7回台湾サキャディータ国際会議に寄せたメッセージにおいても示しているように、「それは、いかなる個人であれ、個人が決定できる問題ではなく、サンガ共同体の問題である¹⁵」という姿勢を崩していない。

そのメッセージでダライ・ラマは、こうも述べている。

ヴィナヤは極めて複雑である。(中略)もしサンガの国際的な会合でこの問題が議論されたなら、有益であろう。すべての主要なヴィナヤ伝統の代表者たちが出席すべきである。その問題は、徹底的な調査と議論に基づいて処理されなければならない。この問題を徹底的に議論するために、開かれた心を持ち、かつ尊敬されている、すぐれた実践者と純粋な学者をも召集することができるなら、我々は肯定的な結果を得ることができるものと信ずる。

このようなダライ・ラマの意向をうけ、ダラムサラにあるチベット亡命政府の宗教・文化省 (Department of Religion and Culture) では、ヴィナヤの網羅的な研究が二十年間もなされてきた。そしてダライ・ラマは、2005年6月28日にチューリッヒを訪問した際、こう言った。「これまで比丘尼戒に関して議論してきたが、何ら決定していない。しかしながら、我々は結論を出す必要がある¹⁶⁾」と。

こうしてハンブルグで国際会議がもたれることになったのである。その会議は、第1回 (First International Congress on Buddhist Women's Role in the Sangha) として開催されたが、実際には総決算のような会議であったといえる。会議最終日に姿をみせたダライ・ラマは、「どうして、このような仏教の会議が、アジアではなくキリスト教文化圏で開かれるのか」と、いたずらっぽい笑みを浮かべて問いかけていたが、どうしてハンブルグで開催されたのであろうか。

それは、この会議を組織した中心人物二人のうちの一人、Carola Roloff (aka Bkikṣuṇī Jampa Tsedroen) がハンブルグ大学の博士候補生だからである¹⁷⁾。チベット仏教を実践

している彼女もまた、サキャディータ創設以来の極めてアクティブなメンバーである。韓国会議のグループ別ディスカッションの折に、比丘尼の資格を得るために1985年に台湾に行かねばならなかった時、生まれてはじめて性差別を経験したと言っていたのが記憶に残っている。

会議に協賛したハンブルグ大学アジアアフリカインスティテュートのインド・チベット仏教学は、そのすぐれた文献研究で世界的に知られている。このインスティテュートが協賛した御陰で、ヨーロッパを中心にヴィナヤにも詳しいすぐれた仏教文献学者をこの会議に加えることができたのである。では、ハンブルグの会議について述べよう。

ハンブルグ国際会議

会議は、そのホームページ (<http://www.congress-on-buddhist-women.org>) から知られるように、ほぼすべてのイベントのCDとDVDを販売するなど、極めてよく企画、準備されたものであった。会議の公表日程は、2007年7月18日から20日であったが、17日夕方にレセプションがあり、発表者や主催者と関係の深い面々が招待された。また21日午前中には、ダライ・ラマの要請でコミティメンバー、ワーキンググループ、そしてチベットの尼僧たちが集められ、追加コメントを受けたようである。

レセプションの基調スピーチは、最後まで会議に列席したチベット亡命政府内閣主席大臣のサムドン・リンポチェ (Samdhong Rinpoche) が行った。再会の喜びに沸き立つ和気あいあいとした会場のムードとは対照的に、リンポチェが現代人にはまれな威厳を放っていたのが印象的であった。またチベットの歌うたう尼僧 Choying Drolma の澄



会場の様子

み切った歌声が、青空会場に響き渡るのも感動的であった。その彼女が二日後に物議をかもそうとは、誰一人知るものはなかった。

18日と19日の両日で六十五の発表があり¹⁸、約400名の参加があった。ダライ・ラマが加わった20日は会場を移し、1200名の聴衆を受け入れた。同日午前中には、Maria Jepsen 司教 (North Elbian プロテスタント・ルター派教会の最初の女性司教) とダライ・ラマの一般講演があり、午後にはダライ・ラマとサムドン・リンポチェ、そして比丘の代表7名と比丘尼の代表8名によってパネルディスカッションがもたれた。

発表者自身による要旨が当会議のホームページからダウンロード可能であり、さらに Alexander Berzin によって発表を含むすべてのイベントの要点が的確にまとめられているので¹⁹、ここでは、個々の発表に関しては立ち入らない²⁰。

この会議の主要目的は、チベット仏教に比丘尼戒を導入する最も適切な手段を検討することであった。会議中に提案された手

続きを大別すれば、二種である。その二種の手続きとダライ・ラマが最終的に示したガイドラインを述べたいが、その前に現代に受け継がれている三種のヴィナヤの伝統を一瞥しておく。

初期仏教時代に十八あったともいわれる部派は、それぞれ独自の三蔵（経・律・論）を保持していたと想定されている。そのうち現在もサンガで用いられている律（ヴィナヤ）は、(1) 南方上座部所属のパーリ律と (2) 法蔵部所属の漢訳四分律と (3) 根本説一切有部所属の律のみである。すなわちこの三種のヴィナヤの伝統（以下順次、Theravāda、Dharmaguptaka、Mūlasarvāstivāda）をもつ比丘の系譜が、Berzin のレポートによれば、断絶なく次の諸国（諸地方）に生き残っている。

Theravāda スリランカ、バングラディッシュ、ビルマ（ミャンマー）、タイ、ラオス、カンボジア

Dharmaguptaka 台湾、香港、中国本土、韓国、ベトナム

Mūlasarvāstivāda チベット、ネパール、イン

ドのヒマラヤ地域、ブータン、モンゴル、ロシア国内の Buryaita と Kalmykia と Tuva

三種のヴィナヤとも比丘戒とともに比丘尼戒も含んでいるが、それらには若干の相違がある。戒の数が異なる他、たとえば、比丘尼の資格を与えるのに必要とされる、比丘と比丘尼の人数や彼らの出家年数などにも相違がある。すなわち Theravāda と Dharmaguptaka では、受戒後 10 年以上を経た 10 名の比丘と受戒後 12 年以上を経た 10 名の比丘尼が必要とされるのに対し、Mūlasarvāstivāda では、受戒後 10 年以上を経た 10 名の比丘と受戒後 10 年以上を経た 12 名の比丘尼が必要とされる。

さて、チベット仏教を実践している比丘尼はすでに存在する。しかしながら、Mūlasarvāstivāda で受戒した比丘尼は今のところ存在していない。というのも、Karma Lekshe Tsomo、Jampa Tsedroen、Tenzin Palmo から欧米人をはじめとするチベット仏教を実践する比丘尼たちは、台湾、韓国、香港などで Dharmaguptaka の比丘尼戒を受けているからである。このような状況下、どうすれば、チベット仏教に Mūlasarvāstivāda の比丘尼を誕生させることができるだろうか。微妙に違う複数の手続きが提示されたが、概ね次の二種の仕方に集約される。

第一の例外的な仕方は、シングルサンガ、すなわち Mūlasarvāstivāda の比丘サンガのみによる授戒である。このような方法の先例として、韓国の Dharmaguptaka の比丘サンガの復興が挙げられた。戦後、韓国では途絶えてしまった Dharmaguptaka の比丘尼の戒脈を復活させるために、まず Dharmaguptaka の比丘サンガのみで比丘尼の資格を与え、比丘尼たちが授戒に必要な出家年数に達した 1982 年にデュアルサンガによる授戒に切り替えている。これに関連

して Theravāda と Dharmaguptaka では、戒脈を再スタートさせる場合には、シングルサンガ授戒がヴィナヤで認められていることが確認された。そして別の状況下でもシングルサンガ授戒が行われてきたという推定もなされ、さらにブツダによってデュアルサンガ授戒が導入される以前はシングルサンガ授戒が行われていたことが、シングルサンガ授戒を肯定する強い根拠となってきたことも指摘された。

第二の例外的な仕方は、デュアルサンガ、すなわち Mūlasarvāstivāda 比丘サンガと Dharmaguptaka 比丘尼サンガによる授戒である。この場合参照するケースとして二例が挙げられた。第一のケースは、スリランカから中国へ比丘尼戒が伝わった時である。その折は、中国の Dharmaguptaka の比丘サンガとスリランカの Theravāda の比丘尼サンガによって授戒が行われ、新生の比丘尼は Dharmaguptaka とみなされた。第二は、1998 年にブツダガヤで Dharmaguptaka の比丘尼戒を受けたスリランカの女性が、その後スリランカの比丘サンガ (Theravāda) から再び



左から Choying Drolma
と Kasur Rinchen Khando Choegya

受戒することによって、Theravāda 比丘尼に転換したケースである。ちなみにこの手続きは *dalhi-kamma* と呼ばれ、これによって以前の受戒がその効力を失うことなくより堅固なものになると考えられている。

なお、第二の例外的な仕方を含めうるものとして、テラワダを實踐するアメリカ人比丘 Bodhi によって提示されたものは、大きな支持を得たようにみえた。それは、Karma Lekshe Tsomo などチベット仏教を實踐する Dharmaguptaka の比丘尼が Mūlasarvāstivāda 比丘サンガから再び受戒し、Mūlasarvāstivāda の比丘尼に転換したうえで、Mūlasarvāstivāda の比丘サンガと比丘尼サンガによる最も正統的なデュアルサンガ授戒を行うというものである。

およそ以上のような仕方が提示されたが、それらを容易に受け入れることのできないチベットの長老たちは、会場にはいなかった。六十五の発表に対する質疑応答の時間はほとんどなく、不在の長老たちに向けてひたすら原稿が読まれたような感もあるが、その不在の長老たちと意見を同じくすると思われる唯一の出席者が、サムドン・リンポチェであった。

サムドン・リンポチェは、Mūlasarvāstivāda においては、異なった二つのヴィナヤの伝統によるデュアルサンガ授戒、並びにチベット仏教を實踐する Dharmaguptaka の比丘尼が Mūlasarvāstivāda の比丘尼に転換する手続きはありえないことを明言した。さらに、ヴィナヤの解釈において彼らが絶対的な信頼をおいている *Guṇaprabha* と *Dharmamitra* の注釈書に従う限り、シングルサンガによる授戒も認められないと断言した。

さて、ダライ・ラマ自身は、どう応じたのであろうか。パネルディスカッションの

テーブルについて比丘と比丘尼をはじめ参加者の多くは、ダライ・ラマが提案された手続きのうちのどれかひとつを選択し、チベット仏教への比丘尼戒の導入の決定をその場で表明することを期待していた。だが、ダライ・ラマがブツダになることはなかった。

我々は皆、Dharmaguptaka の比丘尼戒を受けている [チベット仏教を實踐する] チベット人と西洋人たちを受け入れ、Dharmaguptaka の比丘尼として認識している。この点が問題なのではない。問題は、根本説一切有部 (Mūlasarvāstivāda) のヴィナヤテキストに違わずに比丘尼戒を授ける方法を見いだすことにある。教えを乞うためにブツダが生きており今ここにいる必要がある。もし私がブツダなら、私が決定できる。しかしそうではない、私はブツダではない。ある種の問題に関しては、私は独裁者のように振る舞い得る。しかしことヴィナヤ問題となるとそうはできない。私には、Dharmaguptaka で受戒したチベットの比丘尼が三種のサンガ儀式 [根本の三儀軌]— 月二回の布薩 (Tib. *gso sbyong*, Skt. *upoṣadha*, Pali *uposatha*), 入雨安居 (*dbyar sbyor*, *varṣoṣanāyikā*, *vassopānāyika*), 自恣請 or 雨安居の修了式 (*dgag dbye*, *pravāraṇā*, *pavāraṇā*)— を行うために集合する制度を作ることはできる。しかし授戒儀式を確立するととなると、話は別である。私は確立されることを願ってはいるけれども、長老たちのコンセンサスがどうしても必要である。長老のなかには激しい抵抗を示しているものがある。完全な同意が得られない。問題はそこにある。しかしながら、これら三種のサンガ儀式の Dharmaguptaka ヴァージョンを中国語からチベット語へ直ちに翻訳して、適切なテキストをもつことは可能である。(中略)

もし、ブツダが今日ここにいたら、疑い

なく彼は許可を与えただろう。しかし私はブツダのように振る舞うわけにはゆかない。出家制度は八世紀以来チベットにあるが、いまだ三種のサンガ儀式を行った比丘尼は我々の中にはいない。それがついに始まるんだ。しかし授戒について決めるにはなお時期尚早である。

この三種のサンガ儀式を年内にするのは難しいだろう。しかし来年始めることはできるはずだ。比丘尼波羅提木叉 (Bhiksuni Prātimokṣa) は、すでに中国語からチベット語へ翻訳されている。30 頁から 40 頁くらいである。チベットの Dharmaguptaka の比丘尼はそれを暗記しなければならない。三種のサンガ儀式の実用テキストは、これから翻訳する必要がある。(以下省略)

7 月 21 日の追加コメント

この冬、今回と同じような会議をインドで、ブツダガヤかサルナートかデリーで開こうじゃないか。このハンプルグ会議に出席した国際的なサンガの長老方の他に、我々はチベットのトップのサンガのリーダー達とチベットの四つの伝統学派すべての主要な僧院の管長たちを、さらにおそらくボン教徒も招待するだろう。ボン教にはまだ比丘尼がいる。我々は、長老、もっとも尊敬されている学僧たちをだいたい百人くらい招くだろう。そこで私は国際的なサンガの長老方をお願いがある。比丘尼の授戒を確立した方がよい、そのもっともな理由を面と向かって彼らに述べて頂きたいのである。それはとても効果的なはずだ。我々チベット人がその会議費用を賄い、それを企画する最適任者を決めたい。(中略)

サンガと相談することなしに、チベットの尼僧の教育を改善することはできる。実際そうしてきたし、すでに多くの尼僧が高度の学識を有する。Mundgod の僧院で、私は我々がゲシェマ (Geshema) 試験の準備をしなければならないことを告げた。長老の

中には反対する者もあったが、私は彼らにきっぱりとこう言った。「ブツダは、比丘と比丘尼になる権利を男女平等に与えた。どうして、ゲシェとゲシェマになるのに平等の権利がなからうか?」と。思うに、このような長老僧たちは、単にこういった思考に慣れていないだけなのだろう。

六十年代、私は僧だけでなく、尼僧も召喚してこう言った。「尼僧もまた月二回の布薩儀式に加わることができる」と。当時比丘尼もいなかったし、沙弥尼は僧の布薩に加わることもふつうは許されていなかったけれども、私の教師たちが許可を与えた。そうして我々はそれを始めたのである。南インドの僧院から皮肉たっぷりの反対が何度かあった。というのも、僧と尼僧が一緒に布薩をすることは以前にはなかったからだ。しかし、それが理由で僧をやめた者はいなかった!

七十年代から、中国の伝統から比丘尼戒を受けるチベット [仏教徒] が現れた。私が台湾を訪問した主要目的のひとつは、当地の比丘尼の戒脈の状態を自分の目で確かめることであった。私は、Losang Tsering を任命し、比丘尼戒を調査するよう命じた。実際彼は二十年間そうしてきた。我々は最大限の努力をしてきた。私は中国 [仏教] の中心的な授戒比丘たちに国際的なサンガの会合を企画するように頼んだが、彼らにはできなかった。私自身がそのような会合を開くことはできない。中華人民共和国との関係から生じる困難や複雑さがあるからだ。もし別の組織がそのような会合を開くことができるなら、よりよいだろうと思った。それで Jampa Tsedroen をお願いしたんだ。僧が個人的にできることはすべてなされた。今我々に必要なのは、チベットの長老比丘たちから強力なコンセンサスを得ることである。(中略)

Mūlasarvāstivāda の比丘尼戒を受ける前にそれを勉強することに関しては、Dharma-



ダライ・ラマ

guptaka で比丘尼となった者は、それを読み、勉強してもよいだろう。ただし、儀式は Dharmaguptaka のやり方で行う必要がある。一方、比丘尼でない者が Mūlasarvāstivāda の比丘尼戒を勉強することについてはなお問題がある。(以下省略)

以上は、Berzin のレポートのダライ・ラマのレスポンスの抜粋である²¹。ダライ・ラマがこのような決断をするとは、おそらく予測した者はなかったであろう。これは、ダライ・ラマが比丘尼戒導入の要望と長老たちの抵抗との妥協点を模索した結果であるといえる。

ダライ・ラマは、Dharmaguptaka で比丘尼戒を受けたチベット仏教の実践者をチベットの Dharmaguptaka の比丘尼として承認し²²、彼女たちに、中国語からチベット語に翻訳した Dharmaguptaka のテキストに基づいて、比丘尼サンガの三つの儀式を始めさせようというのである。

チベットの比丘尼がインドでサンガの儀式を行うこと、それはチベット仏教史上はじめてのことであり、比丘尼戒復興運動の大きな成果のひとつであろう。しかしながら、欧米人比丘尼たちに課せられた課題は大きい。儀式テキストを翻訳し、波羅提木叉を暗記するだけでもかなりの労力を要するが、欧米に居住している者にとって、定期的にインドでサンガ儀式を行うことが果たして可能であろうか。「大学の職を捨てなければならないかもしれない」というのは、Karma Lekshe Tsomo から直接聞いた言葉である。さらに問題なのは、たとえ三種のサンガ儀式が順調に行われるようになったとしても、その延長線上で可能となるのは、Dharmaguptaka の比丘尼の産出のみだということだ。もっとも、ダライ・ラマは、21 日の追加コメントによる限り、Mūlasarvāstivāda の比丘尼ヴィナヤの勉強を Dharmaguptaka の比丘尼には許可している

ので、Mūlasarvāstivādaの比丘尼の授戒をスタートさせる道も閉ざしてはいないようではある。

ダライ・ラマは、比丘尼戒の導入に関しては、サンガの分裂を恐れこのように極めて慎重であるが、こと沙弥尼の教育の普及に関しては、長老の顔色を伺うことなく一気に押し進め、ゲシェマの試験準備をしようとしている²³。沙弥尼たちの仏法を最大限に学びたいという熱情に応じてのことであろう。沙弥尼たちのそのような熱情は、ハンブルグの会議において吐露されたが、それが表明されたのは、予定外の出来事においてであった。そのハプニングは、比丘尼戒復興運動の今後のあり方に関わるので、この会議報告の締めくくりとして触れておきたい。

ハプニングが起きたのは、会議二日めの午後7時から二時間予定されていた発表者との質疑応答の折であった。歌うたう尼僧が、唐突に、彼女たちチベットの沙弥尼の問題を彼女たちの意見を聞くこともなく議論していることに対して不満をぶちまけたのである。会議のスケジュールは大変きつく、主催者側が意図して彼女たちに意見を述べる機会を与えなかったわけではあるまいが、突破口が開かれた後に口口に述べられた沙弥尼の意見の中には、聴衆を驚かせるものがあった。会場にいた沙弥尼たちが一致して、中国のDharmaguptakaに依拠することなしにチベットの比丘サンガのみによる授戒を望んでいることは理解に難くなかった。しかしながら、彼女たちが比丘尼戒を問題にするのはまだ早すぎると思っ

のであった。その後様々な意見が飛び交い、結局会場を空けねばならない10時半になってもまとまることはなかった。比丘尼となることを今望んでいるのか否か、チベットの沙弥尼たちの思いが一樣ではないことはその場で確認されたが、欧米人比丘尼を中心に先導された仏教の比丘尼戒復興運動の中に、「啓蒙」の匂いを嗅ぎ、ある種の不快感を覚えた者は筆者だけではあるまい²⁴。

比丘尼戒復興運動は、仏教における両性平等をめざすフェミニズムに基づいて押し進められてきたが、それが必ずしも伝統的な仏教社会に生きる尼僧たちの支持を得ているわけではないことも指摘されている²⁵。また、会議に参加したチベットの僧と尼僧のほとんど全員が、チベット仏教への比丘尼戒導入をめぐる問題は、ジェンダーや個人の権利に関わる一般的な問題ではなく、純粋にヴィナヤの問題であることを強調していた。

二十年間繰り広げられた比丘尼戒復興運動は、今そのあり方について再考を強いられているようにもみえる。しかしながら、伝統仏教にパンチを与え、伝統仏教の間にネットワークを構築し、以前にはなかったグローバル仏教のようなものを誕生せしめたその功績は、あっぱれというほかない。

ハンブルグ国際会議の成果は、主催者が期待したほどのものではなかったであろう。Mūlasarvāstivādaの比丘尼戒の導入問題は、チベットの長老を交えたインドでの会議に持ち越されている。ダライ・ラマが提案したこの会議は、2008年4月現在、いまだ開催された気配はない。ハンブルグ会議の際、中国との関係に言い及んだダライ・ラマは、今は非常に悪いとつぶやいた。ダライ・ラマの表情が、唯一曇った瞬間であった。また、ハプニングのあったあの夜、一人のチベッ

トの沙弥尼が「チベットの比丘尼問題よりもチベットの問題を話し合っしてほしい」と訴えた。まったく場違いな要求であったが、その悲痛な叫びに胸が痛んだものも多かった。今は、比丘尼問題を再び討議する時期ではないのかもしれない。

感想

自分の不勉強をさらすことになるが、筆者はこのハンブルグ国際会議からヴィナヤ(律)の重大性を知って驚いた。仏教はブツダの教説に対する解釈(論)を時代とともに発展させてきただけでなく、ブツダの教説(経)そのものでさえも次々に創造してきた極めて柔軟でおおらかな宗教運動であると信じてきた。しかしながら、ヴィナヤというものは容易に変更できない大変な権威をもっているのである。

テーラワーダやチベットの長老が比丘尼戒復興に同意できないのは、一般に考えられているような女性蔑視や、あるいはダライ・ラマが揶揄するような心の狭さ(narrow-minded)によるものだけではない。筆者はテーラワーダの比丘たちから直接話を聞く機会を得たが²⁶、ヴィナヤを遵守しようとしている彼らにとっては、ヴィナヤは真に冒しがたいものであった。彼らは、同じ Theravāda でも宗派が異れば、合同で比丘の資格を与えることに対してでさえ、違う血液型の血が混じり合ってしまうような恐怖を感じるのである。いわんや、二種のヴィナヤの伝統によるデュアルサンガ授戒などは、存り得ないのであろう。戒律仏教といわれるテーラワーダ仏教ほどではないにせよ、チベット仏教やその他の大乘仏教でもヴィナヤの重大性にはかわりはないようである。

註

* All photos by Moni Kellermann (www.kellerfrau.de).

1. 具足戒の数は、伝統によって相違がある。テーラワーダのヴィナヤでは、比丘戒は 227 戒、比丘尼戒は 311 戒。

2. ビルマにも比丘尼が存在した可能性については、Hiroko Kawanami, "The Bhikkhuni Ordination Debate: Global Aspirations, Local Concerns, with special emphasis on the views of the monastic community in Burma," *Buddhist Studies Review* 24/2: 229-30, 2007 参照。

3. 竺沙雅章「中国における尼僧教団の成立と発展」(『シリーズ女性と仏教 1 尼と尼寺』、平凡社、1989) 43-69 参照。

4. 女性がチベットに戒を伝えるには地理的条件が悪かったことが、チベットに比丘尼サンガが確立されなかった大きな理由の一つとして考えられている。

5. 足羽與志子「仏教尼僧戒復活にみる現代文化の景観」(『一橋論叢』120/4: 96-123, 1998) では、サキャディータの活動が社会学的見地から考察されている。筆者の知る限り、これがサキャディータについて考察した唯一の論文である。

6. *Sakyadhita Newsletter* 16/1 (Summer 2007) では、設立 20 周年を記念してこれまでの活動が回顧されている。

7. ダライ・ラマの講演には、1500 名以上の聴衆があったという (*Sakyadhita Newsletter* 16/1: 8)。

8. 現会長 Karma Lekshe Tsomo が、インドで瞑想中に毒蛇に噛まれ重傷を負ったため。

9. 筆者は、2004 年 11 月に国際基督教大学キリスト教と文化研究所において、この会議の内容を中心とした講演(「仏教のグローバルゼーションと国際女性仏教者運動」)を行った。その講演要旨は、当研究所発行の『科学史フォーラム Newsletter』9 (2008 年 3 月)に掲載されている。

10. 具足戒がもはや授受されていない日本の伝統仏教は、比丘尼戒復興運動に対する関心が低い。もっとも、『ジェンダーイコールな仏教をめざして 続女たちの如是我聞』(女性と仏教 東海・関東ネットワーク編、朱鷺書房、2004) という書物が出版されていることに明らかなように、日本でも仏教実践上の男女格差をなくそうという運動はある。筆者はこの運動に関わっている人たちの努力と勇気を賞賛するが、そこでは寺の世襲制にまつわる性差別など

が話題となっており、伝統的な出家仏教が共有している比丘尼戒の問題は扱われていない。

11. 第8回サキャディータ会議のResolutionの第三に“Promote equal rights for education and orientation for Buddhist women, including direct advocacy at the government level”とある。

12. Kawanami 前掲論文, note 8 (227-8) 参照。

13. ダサシルマータが大乗（韓国）の法衣の着用を求められ、大乗の作法で受戒を行ったことが問題となった (ibid., 227)。なお、大乗仏教では菩薩戒も授受する。

14. 川並宏子「仏教」(田中雅一・川橋範子編『ジェンダーで学ぶ宗教学』世界思想社、2007) 35。

15. Karma Lekshe Tsomo, ed., *Bridging Worlds: Buddhist Women's Voices Across Generations* (Yuan Chuan Press, 2004), vii.

16. <http://www.congress-on-buddhist-women.org/index.php?id=3>

17. 会議を主催した組織は、Studienstiftung für Buddhismus (Foundation for Buddhist Studies) であり、Schmithausen はその委員の一人である。詳細は、<http://www.studienstiftung-fuer-buddhismus.de/> 参照。

18. 日本からの発表者は、荒牧典俊と Florin Deleanu、さらにサキャディータ会議の常連発表者である伊藤友美と Shobha Rani Dash であった。その他の日本からの参加者は、筆者のみであった。

19. “A Summary Report of the 2007 International Congress on the Women's Role in the Sangha: Bhikshuni Vinaya and Ordination Lineages” (<http://www.berzinar-chives.com/web/en/index.html>).

20. 一点のみ記しておくなら、Oscar von Hinüber によって、「ブッダ在世時にはおそらく比丘尼は存在しなかったが、ブッダの死後、すでに女性修行者を受け入れていたジャイナ教と競うために、主にアーナンダによって比丘尼サンガが始められた」という主旨の常識をくつがえす発表がなされた。その後 von Hinüber は、2007 年秋に日本滞在中、京都と東京で数回の講演を行いながら当論考をさらに発展させ、最終的に以下の論文として公表するに至っている。Oskar von Hinüber, “The Foundation of the Bhikkhunisangha: A Contribution of the Earliest History of Buddhism,” *Annual Report of The International*

Research Institute for Advanced Buddhology at Soka University 11: 3-30, 2008.3.31.

21. 抜粋和訳文中、筆者が補足した部分は [] で括った。なお、ダライ・ラマは、会議の最後に用意してきた声明文 (<http://www.congress-on-buddhist-women.org/index.php?id=142>) を読み上げた。

22. ダライ・ラマの 20 日午前中の講演によると、現在二十数人 (two dozen) いるという。

23. ゲシエマとは、女性出家者にとっての最高の教育あるいは学位のことであるが、その教育の最終段階に Mūlasarvāstivāda の比丘尼ヴィナヤの勉強を含む。亡命政府の宗教・文化省は、沙弥尼がそれを勉強することを認め準備もしているが、講師の長老比丘は比丘尼戒を受ける以前に比丘尼ヴィナヤを勉強することは文献上許可されていないと主張している。

24. 会場が騒然となるなか、チベットの沙弥尼たちのお母さんのような存在である Rinchen Khando Chogyal (retired Minister of Education of the Tibetan Government in Exile, Director of Tibetan Nuns' Project) は、尼僧たちを [チベットに比丘尼サンガがないことを問題視するように] プッシュしないしてほしいと、穏やかなしかし強い調子で言った。またハンプルク大学の筆者の研究仲間からは、比丘尼戒復興運動に加担するのを嫌い、発表を断った学者や会議を覗こうとすらしなかった学者がいたことも耳にした。

25. Kawanami 前掲論文参照。1995 年から 2001 年までサキャディータの副会長であった、ランカスター大学専任講師川並宏子によるこの論考は、説得力のあるものである。川並先生が 2007 年 9 月に一ヶ月間南山宗教文化研究所に研究滞在中に折、筆者は比丘尼運動について直接お話を伺うことができた。もっとも本稿に残っているやもしれない誤りは、すべて筆者によるものである。

26. 筆者は 2008 年春学期にロサンゼルスにある University of the West で集中講義を行ったが、学生にはテラワダの比丘たちもいた。またロサンゼルスにはタイ仏教を中心にかかなりの数のテラワダの寺院があり、それらを訪問した際に比丘たちの意見を聞くこともできた。

いわもと・あけみ
南山宗教文化研究所非常勤研究員